

手拭掛

〔和漢三才圖會三十二〕家飾具衣桁略○中略。幌架略○手略。手拭掛略○中略。

幌架、乃手巾掛也、每居盥盥之傍、閨房、

〔増補訓蒙圖彙六〕衣服手のごひかけを、幌架といふ、

〔調度口傳〕手拭掛之事

高サ一尺六寸、巾二尺、衣桁ノ如クシタル也、手拭、足拭、手拭、コレハ一尺二寸、足拭ハ一尺四寸、

〔女用訓蒙圖彙二〕同御厨子黒棚かざりの事

手拭掛は黒棚の左の方に置べし

〔諸艶大鑑三〕樂助が靱猿

さる人庭櫻咲きて見にまかりしに、きのふも客のありし跡と見えて、紅梅染の手拭掛は信長時

代物、檜垣の蒔繪、このもしかりしに、略下

〔諸艶大鑑四〕情懸しは春日野の釜

是なる栴より鑲をおろし釜掛けてそこに袋棚、爰に懸物は、大坂よりことづかりて、宵にわたせし

男の文を其ま、一夜に表具して、手拭かけの竹こそ枯つれ、蒔石は人もくづさず、

〔數奇道具定直段附後篇〕塗師宗哲

手拭掛 金物共

百五拾目

手拭ノ栴

〔筆の靈後篇四十五〕かせ杖

又手のごひのかせと云名あり、其は井蛙抄六に、短冊を泉の水の中に吹入られ、手のごひのかせにかけて、とりあげなどして、見ぐるしかりけり、とある是なり、其は今の常の手拭かけとは異狀にて、**上**かくざまなる上の方に、かくる所ありて、軒などにつりさげ、下のかせの所に、手拭をま
とひかけしなるべし、略下